

第53集 研究紀要

三好教育研究所



家庭や地域、中学校との連携を密にした特色ある学校づくり ～小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学び～

東祖谷小学校 教諭 森永 直美

少子化による児童数の減少などに伴い、多くの小学校が閉校・統合されている現在。どのように新しい学校を築いていくのかは、私たち教師にとって大きな課題である。

本研究では、小学校の統合と小中一体型校舎の建設をきっかけにして、家庭や地域、中学校との連携を密にした特色ある学校づくりに取り組んできた。地域の特色を生かしつつ、9年間を見通した小中連携教育を計画・実践している一端を紹介する。



人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動 ～ESD(持続発展教育)の視点を取り入れて～

池田中学校 教諭 丸岡 美枝

平成21年春、三好市内の2中学校の統合により開校した池田中学校は、統合前の2校から引き継いだ様々な教育活動に十分な系統性・関連性を図る準備ができていなかった。そこで、持続発展教育(ESD)の原則や価値観を取り入れることでその教育的課題の解決を目指して、「世界的視野・未来志向・地域密着・自立と共生」を基本に据えて取り組んできた。生徒たちは少しずつ、未来への責任感を抱いたり多様性への理解を深めたりしており、ESDのめざす「持続可能な社会づくり」のための小さな一歩を踏み出していると言える。

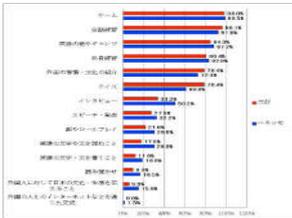


三好郡・市小中学校における情報モラル教育 ～学級担任アンケート調査と研究授業より～

三好教育研究所 研究員(現 昼間小学校 教諭) 山口 恭史

現在の情報社会において、児童生徒の心と知恵の両方を磨くために情報モラル教育は必要不可欠であり、今後ますます重要になってくると考えられる。

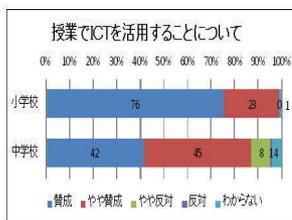
そこで、三好郡・市小中学校の学級担任に平成22年度はマークシート方式のアンケートで、23年度はグループウェアのメッセージ機能を使ったアンケートで行った調査結果と、小学校で行った研究授業をもとに情報モラル教育について考察した。三好教育研究所に勤務していた2年間に研究実践したことを紹介する。



「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること

三好教育研究所 研究員 山下 達也

平成23年度から小学校外国語活動が全面実施され、平成24年度からは、外国語活動を経験した生徒が中学校で学んでいる。こういった時期を経た小・中学校の指導者がどのような考えや思いを抱いているかを調査し、今後の参考になればと願って今回の調査をすることにした。



三好市・三好郡の小・中学校におけるICT活用状況について

三好教育研究所 研究員 岡本 博一

三好市・三好郡の学校現場では、教育委員会や三好教育会が率先して教育の情報化を進めてきており、その活用が日々の教育活動の中で進められている。

しかし、小学校と中学校ではその活用に差が見られるなどの課題も指摘されている。三好教育研究所では2012(平成24)年11月に、三好市・三好郡の教職員を対象に、「ICT活用状況に関するアンケート調査」を実施した。その調査をもとに、三好市・三好郡の小学校、中学校の学校現場におけるICT活用状況について、現状と課題を考察する。

言葉による伝え合いが成り立つために ～絵本の読み語りをとおして～



池田幼稚園 教諭 元木 真砂代
絵本により多く出会うことによって、その後の子どもの言葉の引き出しの数が変わってくる。言葉の引き出しを沢山もっている子はそのうち、その沢山の引き出しの中から言葉を選んで話すことができるようになる。そうして、友達とのコミュニケーションが深まり、楽しい時も辛い時も話をする事ができれば、そのことが豊かな人生へと繋がる一つの手助けとなっていくのではと思う。

絵本をとおして、様々な遊びや活動を経験し、友達に対する優しさを養い、友達と遊ぶことの楽しさを感じ、豊かな感性や表現力を身につけるために、教師がどうかかわるか、またその環境構成について研究し実践していく。

一人一人の豊かな未来につながる教育 ～共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育の視点から～



三庄小学校 教諭 近藤 博美
障害の有無にかかわらず、地域社会の中で積極的に活動しその一員として豊かに生きることができるよう、地域の同世代の子どもや人々の交流等を通して、地域での生活基盤を形成することが求められている。そのような共生社会実現のために、可能な限り共に学ぶインクルーシブ教育が注目されている。支援学級に在籍するAさんが小学校卒業を迎える本年、将来も共に生きる仲間としての意識を大切にしながら様々な教育活動に取り組んできた。その取組の一端を紹介する。

震災に学ぶ ～実践を通して防災意識を高めよう～



芝生小学校 教諭 園尾 淑子
平成25年3月で東日本大震災から丸2年が経つ。あのときの映像は今でも脳裏に焼き付いている。徳島県においても近い将来地震がおこると予想されている。そこで、児童の防災の意識を高め、自分の命を自分で守れる子どもに育てていきたいと考え、いろいろな実践を試みた。2月の学習発表会では、自分たちが学んだことや調べたことを発表する場を設けることができた。児童や保護者、地域の方々にも聞いていただき、学んだことがより確かなものとなった。募金の呼びかけにも協力して下さった。

価値判断・意思決定する場面で活用できる知識の習得をめざす教師の手だて ～「わたしたちの願いを実現させる市の政治の動きを調べよう」の学習を通して～



白地小学校 教諭 神谷 美樹
少子化傾向に歯止めがかからない現代において、子どもたちが将来、社会で果たす役割は大きい。6年生の子どもたちには、自分たちが住んでいる地域の現状や政治の動きに関心をもち、主体的に学んでほしいと考えている。

本研究では、子どもたちが価値判断・意思決定する場面で活用できる知識の習得をめざし、どのような手だてが有効であるかに迫っている。自分たちが住んでいる地域の学校跡地利用を考える学習を通して政治の仕組みを学び、学んだ知識の定着を図るためにロールプレイという方法を用いた取組を紹介する。

ふるさとを愛し、いきいきと学び合う心豊かな子どもの育成 ～人との豊かなつながりを通して、認め合い、支え合い、ともに生きる教育活動の創造～



樺生小学校 教諭 岩崎 真人
自然に恵まれ、素朴な人間関係の中で温かく育まれている樺生小学校の児童であるが、ここにも例外なく過疎化・高齢化の波が押し寄せ、児童数はほとんど減少している。

このような現状をふまえた時大切なのは、児童のふるさとに対する思いを高めていくことだと考える。

地域とつながる食に関する指導



三野中学校 主事 小出 真理子
近年、子どもたちを取り巻く食環境・社会環境は変化し、核家族化や共働き家庭の増加等により家庭調理にかかる時間も短くなってきている。さらに、地域で昔から受け継がれてきた郷土料理を調理したり食べたりする機会も減ってきている。しかし国際化が進む中、次世代を担う子どもたちに日本の食文化の理解を図り、郷土を愛する心を育む必要がある。

そこで、地域や家庭と連携しながら、生徒が徳島県や地域に関心をもち、郷土を愛する心を育めるような実践を行った。

社会科における言語活動の充実 ～社会的事象の意味、意義を解釈する学習や、 事象の特色や事象間の関連を説明する学習における指導の工夫～



三好中学校 教諭 片山 徹
最近の社会科では「文章・資料・グラフ・図表を読み取り解く問題」や「文章を簡潔にまとめ書く」といったような問題が多くなっている。

そこで、文章・資料・グラフ・図表を正確に読み取り、それをまとめ説明する力を身につけさせるための普段の取り組みをまとめてみた。